

モノクロの世界に色をつけて

■トライック1

泣いているの？と声がした。

顔を上げるとモノクロの世界に男の子が立っていた。

歳は私と同じくらい。

男の子は首をかしげながら、私を見ている。

私は返事をせずに、またうつむく。

「美桜ちゃん、だよね？あれ違ったかな？」

まだ何かをしゃべっている。

うるさい。

男の子の声なのか、風の音なのか、私の声なのかわからない。
何も聞きたくないのに、雑音がうるさかった。

かさかさ」と音がした。

かさかさ、かさかさ……。

なじみのあるような、懐かしいような音だったけれど、なんの音なのか思い出せない。
だけど妙に、落ち着くような音。ずっと聞いていたくなるような音だった。

わたしは気になって音のする方に顔を上げる。

男の子が隣に座っていた。

スケッチブックを開き、鉛筆で何かを書いている。

楽しそうに書いている姿が、お母さんの姿と重なった。

お母さんもノートを開き、楽しそうにペンでたくさん書いていた。

かさかさ、かさかさ、心地よい音を鳴らしながら、鉛筆で書き続ける。

「なに書いているの？」と私は聞いた。

「やつとこっち見た」と男の子は無邪気な笑顔で言った。「桜の絵を描いてるんだ。ほら、あそこの桜の木。
この場所いいね。桜がたくさん見える」

「桜が好きなの？」と聞くと、「とっても好き」とまた無邪気な笑顔で言いながら、書き続ける。

お母さんも桜が好きだった。この展望台から見る桜が好きだった。

私は桜を見て嬉しそうに笑うお母さんが好きだった。

桜舞う景色のなかで、楽しそうに物語を話すお母さんが好きだった。

美桜って名前を呼んでくれるお母さんのことが好きだった。

お母さんのことが大好きだった。

「よし！ できたー！」

男の子が手を止める。

スケッチブックを覗くと、枯れ木だけが描かれていた。

花びらが一枚も描かれていない、枯れ木だけの寂しい絵。咲くことをあきらめた桜の木の絵は、わたしみたいだった。

「ノルマニヤー」の「ノルマニヤー」

かきかき、かきかさ、とわたしの好きな音を鳴らせながら、男の子は描き始める。

花びらが描かれていく。

1枚 2枚 3枚

10枚、20枚……。

鉛筆で描かれたモノクロの

「僕、大きくなつたら画家になりたいんだ。お父

——がお父さんみたいに絶対上手にならぬ
——絶対絶対お仕事をするのが僕の夢なんだから
——美林ちゃんは

そのように聞かれて、わたしは悩んだ

だけど……。

「作家さん」が「私を斬る」と。」「お前さんたち

好きな人を笑顔にできるような作家さんになりたい」

だけどすぐに消えた。

おほいの色のついひ景色のアリに感ふくしてゐる

「じゃあさ」と男の子が言った。「僕たちが大きくなったら 絵本を作こうよ。美桜ちゃんが作ったお話を

楽しそうに話す男の子を見ていたら、わたしも楽しい気持ちになつてきた

と睨みた。

「わだしたせ、まだ会えるかな？」と私は不安を口にした。

私の浮かない顔を見たのか、男の子は一度首をかしげる。それから、につっこりと笑顔を浮かべて、「約束しようよ」と小指を出した。

「僕たちは大きくなつたら絶対一緒に絵本を作る。約束を破つたら、ハリセンボンは危ないから、嘘つい

たほうが相手の言うことをなんでも一つ聞くてどうかな？」

男の子の言葉に、私は答える。

「それじゃ、私が約束破つたら、君に描いてもらつお話を1,000本書くから、君が約束破つたら、私のお話につける絵を1,000枚描いてね」

男子は目をパチパチしたあと、あははと大笑いした。

私も笑つてしまい、お互い小指を絡めて、指切りげんまんを始める。指切りげんまん嘘ついても嘘つかなくても絵本をつくる、指切った。お互いの指が離れた瞬間、目の前の景色が急にぼやけた。

目を覚まして、顔をあげると、見慣れた私の部屋だった。指先には手紙があった。

手紙を読み返している最中に寝てしまつたのだと気づいた。手紙のうえには、桜の花びらが一枚ちゃんとついていた。きっと窓の隙間から入ってきたのだろう。

花びらをつまみ、「嘘つき少年め」とちよっぴり意地悪く語うと、私は立ち上がり、窓を大きく開ける。春のポカポカ陽気を肌に感じながら、腕を伸ばし、手のひらをかざす。

花びらが私の手のひらから、ふんわりと舞い上がりそよいでいく。自由に空を羽ばたくツバメのように、花びらもひらりはらりと風に揺れていく。

何もなくなつた手のひらを見て、私は悲しい気持ちになつた。

飛べる翼があるなら、羽ばたくべきだと私は思う。

地上にて死を待つより、同じ翼を持つ仲間と一緒に、本来いるべき場所に戻るべきだと思う。でも、私はやっぱり自分勝手で、引き留めるべきだったと心のどこかで思つてゐる。

一番の嘘つきは私だった。

行かないで、私のそばにいて。

あのとき、そう口にしていたら、彼はいまでも私のそばにいてくれただろうか。目頭が熱くなるのを感じ、私は軽く頬を叩いた。

「よーし、書くぞー！」

バカな私は物語を書くしかない。物語を書くほかに彼に伝える手段を知らない。私には物語しかないのだ。

嘘つきで、意地悪で、優しい男の子。

兄のような、弟のような、男の子。

桜餅と絵を描くことが大好きな男の子。

いつだって私を笑顔にしてくれる魔法使いの男の子。

そんな男の子のことを思い浮べながら、いつか届くと願いながら、私は今日も物語を書き始める。

■トライック2

「んにちは♪。

はあ…

えいっ

あはは、やつといつち見た♪
来てたのか…、じゃないよ！

集中しちぎ♪。

桜を描く♪とにこだわりを持っているのは知ってるけどさ、
つまらなそうな顔をしながら描いたつてきっと良い絵にならないよ。
眉間にシワすゞ寄つてた。怖い顔になつてたよ。
ほら、笑おう、「んな風に」にこゝ♪

ふふ、笑つてくれた。

えへへ、そうだよ、私は君を笑顔にする魔法使いだからね。
でも、変な顔は余計だと思うの…。

ダメで～す。お姉ちゃんは深く傷つきました。

罰として、絵を描くのを隣で見る権利を要求します。

えへへ、ありがとう♪

ふふ。

「どうした？」

んくん。なんでもない。

君の描く色や絵が好きだな～って思つただけだよ。

今日の夜、行くからね。

君の家に決まつてるでしょ。

そうそう♪お泊りお泊り♪姉弟水入らずのお泊り会を開催します♪

明日は休みだし。今日は寝かせないぞ♪

また意地悪言う。

そもそも君が悪いんだよ。高校に入つてすぐ一人暮らし始めてさ。
高校生の男の子だし、一人暮らしに憧れるのはわかるけど、弟が大好きなブラコンお姉ちゃんとしては
さ、弟と一緒にいられないのは寂しいし困るのですよ。

お父さんも寂しがつてゐるんだよ？

そのことを理解しているのかな、不良の弟くんは。

えい！

あははひやいたて
脇腹弱いよね。

「ちがうちがうもしてあげようか。

‘**يَا أَيُّهَا الْمُرْسَلُونَ** إِذَا قُتِلْتُمْ فَلَا يَحْكُمُوا عَلَيْكُمْ مَا لَمْ تَعْمَلُوا وَلَا يُؤْخَذُ عَلَيْكُمْ مَا لَمْ تَفْعَلُوا وَلَا يُؤْخَذُ عَلَيْكُمْ مَا لَمْ تَعْلَمُوا وَلَا يُؤْخَذُ عَلَيْكُمْ مَا لَمْ تَرَوْ

抵抗してもだめだよ

もうひとしてあるに

一人暮らし始めてごめんなさい。

大好きなお姉ちゃんをおいて一人暮らしあじめてごめんなさい」と言つたら許してあける。

「やめてくれ」

おははと参ったな。

二十一

三六二

最近、弟がどんどんそつけなくなつて、お姉ちゃんは悲しいのです。
だから、はい！

わっ、驚きだ。まだ抵抗するんだ。

「ちよ、ちよの刑をまた味わいたいのかな？」

あはは、離れないでよ。冗談だから。

「…君を画面にこせるには、これが一番だ。」

君に食べてもいい」とだけを想つて愛情たっぷり注いでつくった桜餅だよ。

老舗の和菓子屋店長から受け継いだ、

とっても、とっても美味しい桜餅を作つて持つて、こうと思うんだけど、どうかな?

あはは、びっくりするぐらい素直だ。

それじゃ、帰ろっか♪

せつかくだし、恋人繫ぎする?

だめか〜。

あつ、そうだ。小説書き終わつたから読んでくれる?

前に言つてた黒いカラスと白いカラスのお話完成したの。

自信作だから、楽しみにしてて。

君に読んでもらつたために書いたんだから♪

どうかな?

ほんと?ほんとにほんと?嘘じやない?今回の話そんなによかつた?

ん〜、やつた〜!珍しく君に褒められた!

嬉しいに決まってるよ。君のコメントいつも結構辛口なんだもん。

まあ、だから助かるつてのもあるんだけどね。えへへ〜。

そつか、好みのお話だつたんだ。

えつと、それじゃ……のお話に絵を…。

ううん、なんでもないつ。

あつ、もう〜んな時間。

そろそろ君も寝る時間だよね。

もちろん、一緒のベッドで寝るよ♪

せつかくのお泊りだし。

もし断つたら〜、こちよ、ちよの刑だよ♪

■ ト ラ ッ ク 3

ふふ、あつたかいね♪

あ〜、ら〜、なんで離れようとするの

この狭さがいいんじゃない。

ちゃんと暖かくしないと、風邪ひいちやうよ、こいつ来て。

えへへ、捕まえた。

君が悪いんだよ、お姉ちゃんの言つことに逆らうんだから
お姉ちゃんの命令は絶対なのです♪

昔はよく一緒に寝たり、一緒にお風呂入つたりしてたよね。
それが今では…。はあ…。

一緒に寝るのは断られ、一緒にお風呂に入るのは断られ、手を繋ぐのだって、桜餅を渡さないと繋いで
くれない。

もうつー私はいつたいどうすればいいの！

「逆切れかよ」

もちろん、怒るよ、激おこだよ。

態度だつて年々そつけなくなるし、

私に相談なしに勝手に一人暮らし決めてさ、バイトだつてきりやんと決めちゃうし。

君はいつになつたら反抗期をやめるのかな？

「反抗期じゃないし」

ええ、絶対反抗期だよ。

はあ…。昔はよかつたな。

いつだつて私の後ろをとついてきて、私が寝ていると「お姉ちゃん一緒に寝よう」とお布団に潜り
込んできて、私がお風呂に入つていると、「僕も入るー」と入つてきて…甘えん坊で可愛かつた
のに、

「記憶の捏造！」

あはは、騙されなかつたか。

はいはい、そうですよ。今言つたことはぜんぶ私のことですよ
甘えん坊はぜんぶ、私のことですよだ♪

えへへ、意地悪言つた罰で、今日は私の抱き枕になつてもらうから。

もー。私が何か抱いてないと眠れないの知つてるでしょ？

いつもはカー君抱いて寝てるけど、今日は持つてきてないからね。

そうそう、カラスのぬいぐるみ。

捨てるわけないでしょ。君が初めてのバイト代で買っててくれたやつなんだから。
大切にするに決まつてる。

意地悪い言う君には、ぎゅーってしちゃうからね。
ぎゅー。

ふふ、照れてる♪

もつと身体を押し付けちゃうぞ、ぎゅー

ふふ、私だつて恥ずかしいよ。だけど、もつと君と触れ合いたいんだよ。
だから…もつとぎゅーってしちゃうの。

ぎゅーーー。

へー、私のこと襲いたくなるんだー。

いいよ、襲つても♪

君にならいつ襲われたつていい。

私はね、昔も今も変わつてないよ。

今も一緒に寝たいと思つてるし、一緒にお風呂入りたいと思つてる。恋人の男女がするような」とも、君とならしたいと思つて、いるよ…。

私たち姉弟だけど、姉弟じゃないんだよ…?

ねえ、私が告白したこと覚えてるよね?

だよね。忘れるわけないよね。

私の気持ちは変わつてないから。ずっとずっとこれからも続く永遠のものだから。
だから…私の気持ちは変わらないって、覚えておいてもらえると嬉しいな。

それとね…私はどんなことがあっても、君の味方だから。

私というのが本当に嫌になつたときは、ちゃんと言つてね。

君を追いかけるような真似はしないから。困らせないで、ちゃんと応援するから。

私たちの関係が、君の重荷になるない、忘れたつていいから。

自分が幸せになる道を選んでね…。

君の幸せの中に、私がいたら嬉しいけどね。あはは。

あつ…。

ふふ、手を握り返してくれるから、私も勘違いしちやうんだよ。

私の初恋は終わつてないって、まだ可能性があるんだって。

「姉弟なんだし、手を握るぐらい当たり前だろ」

あはは、そうだね。

姉弟だもん。手を握るぐらい普通だよね。

これからもたくさんアタックするから覚悟してね。

いつか絶対、君に振り向いてもらうんだから。

ふふ、おやすみなさい。

すう、すう、すう、すう
すう、すう、すう、すう

■ トランク4

外で部活するのもたまにはいいよね。

展望台の景色を眺めながら、私はノートに物語を書き、君はスケッチブックに絵を描く。
なんて贊沢な時間♪

今からすっごく楽しみだね♪

「同じ部活じゃないけどな」

もう。また意地悪言う。

たまにはいいでしょ? 文科系の部活同士コミュニケーションをとっても。みんな用事があつて、部活出られないんだもん。

一人で部活出てもつまらないし。

「おれはいつも一人だけどな」

君がいつも一人なのは、他に部員がないからでしょ。

去年の勧誘もぜんぜん真剣にやってなかつたし。

私たち、もうすぐ卒業だよ?

一人も後輩いなかつたら、美術部なくなつちやうんじやない?

「別におれがいなくなつたあと美術部がどうなると関係ないし」
冷めてるな。

まあ、確かにね。

私たちがいなくなった後のことを考えても、しょうがないけど…。

でもさ、君のお父さん有名人だし、部員いなくとも美術部は残りそうだよね。世界的な有名画家が所属していた美術部つて。

わつ、あからさまに不機嫌になつた。

君つてお父さんのことほんと嫌いだよね。

あんなに格好いいのに…。

あはは、動揺してる♪

冗談だよ。かつこいいとは思うけど…。

私は君のほうが格好いいと思ってるよ。

君は私にとつては世界中で一番格好いい男の子だよ。

待つてよ。歩くの早いよ!

えへへ~。

あつ、ごめんね。どうしても顔がにやけちゃつて。
モデルだし、表情もビシッとしないとダメだよね。
ちよつと待つてて、気持ちを落ち着けるから。

すくはー、すくはー。

すくはー、すくはー。

よーし!

じんといー！

えへへへ。

「顔！」

あれ？まだにやけてる？

う、だめだ。嬉しそうで、顔が勝手に緩んじやう。

「そんなに嬉しいものか？」

嬉しいに決まってるよー。

君が私の絵を描いてくれてるんだよ？

それだけでも嬉しいのに、君が…すゞく真剣な目で私を見てくれるから…。

「絵を描くためなんだからしようがないだろ」

画を描くためだってわかつてること、照れるし嬉しくなっちゃうんだよ。

好きな男の子が私だけを見てくるって思うと、胸がぽかぽかして幸せな気持ちになる。

ただでさえ、好きなのに、そんな真剣な目で見られたら、もっと好きになっちゃうよ…。

わー。呆れた顔された。

なんか悔しいし卑怯…。

「卑怯つて……」

だつて卑怯だよ。私だけ一方的に照れちゃう状況なんだもん。

私だけ恥ずかしいのは嫌だよ…。

あっ、お姉ちゃん、ひらめきました♪

愛してるゲームしようよ。

中学のとき、流行つてやつた」とあるでしょ。

交互に「愛してる」と言つて、照れた方が負けつてゲーム。

今からしよつ♪

「めちゃやくちや言つてる自覚ある？」

めちゃやくちや言つてる自覚はあるけど、君にも恥ずかしがつてほしの！

とにかくやるよー。はい、君からどうぞ！

このゲームは言つほうが一番恥ずかしいんだから。

恥ずかしい気持ちをしつかり味わつてください♪

さあ、どうぞ！

ふふ、ふふ、ふふ、どうしたの？ どうしたのかな？ はやく言つてよー。

どうして言つてくれないのでー。

もしかして、恥ずかしいのかな？

家族に愛してるつて言つただけなのに、恥ずかしいのかな？

血は繋がっていないとはい、ただの姉弟なのに、言つのはずかしいのかな。

私のこと異性として見てなかつたら、照れずに話せるはずだよね。
私のこと家族としてしか見られないって、振った君なら照れずに話せるはずだよね。
ねえ、早く～。早く話してよ～。愛してるって。
愛してるので話して♪

「……愛してる」

あつ…。

はいっ！私も愛します！

君のこと愛します！

あつ、あれ？

わあ～！ごめん！

そうだよね、ゲームだよね。

今のはなし！間違い！完全に間違いだから！

思わず口から出ちゃつただけだから忘れて！

君の番は終わり！今度は私が言うから！

愛してる！

愛してる、愛してる、愛してる、愛してる、愛してる、愛してる！

すう～！愛してる！

どう！照れた！

う～。笑うな～。

ふつ、ふつ、あははは

あ～あ、だめだね、ぜんぜんゲームにならないや。

私、田つむつしていることにするよ。

あはは、最初からこうすればよかつたね。

うん、描いて。

できた？見せて見せて♪

やつぱり、好きだな…。

君には私が～う見えているの？

そつか、嬉しい。

あのさ…すう～今更な～ことで、もう遅いんだけど、美大行がなくて本当に良かつたの？

私、知ってるよ。部屋に美大のパンフレットたくさんある～こと。

東京の美大のパンフレットに、付箋を貼つてた～ことも。

でも、結局、受験しようともしないで、画廊への就職決めちゃつたよね。

「画廊そんなにダメか？」

「ううん、そんなことない。君にぴったりな仕事だと思う。絵は上手だし、美術の知識も凄いし、勉強もできるし。でも、私は……、絵を描く仕事を選ぶと思っていたよ。

「仕事しながらでも描くことはできるや」

「それは……。そうだけど……。

仕事をしながらでも描くことはできるナビ……。

あはは、そうだよね、私もお仕事しながら作家を目指そうと思いつてるし。全然おかしなことじゃないよね。

学費とかで私のお父さんに遠慮してるのがなって思つてただけだから。うん……。それならいいんだ……。

君が平氣なら全然いい……。

ごめんね。変なこと聞いちやつたね。

絵、描いてくれてありがとう♪

■トラック5

なかなか決まらないね。

ショッピングモールを歩いていたら、ビビットと来るのが見つかると思つたんだけどな。去年は何買つたんだつけ。

あー、そうだ、グラスだ。

今年も同じのプレゼントするわけにもいかないし。

うくん、悩む。

選ぶの年々難しくなつていくな。

もう今年からあげるのやめよっか♪

お父さん、お誕生日おめでとう♪ つて最愛の娘と息子からの愛を込めたバースデイメッセージだけで、お父さんも喜んでくれると思つうの♪

「それはダメだつて」

「あははー、怒られちやつた。

でも、まあ、お父さん毎年楽しみにしているもんね、私たちからのプレゼント。だから毎年選ぶハードルが徐々に高くなつてるんだけど。うくん、何にしよう?

「桜餅はどうかな?」

桜餅つて、絶対君が食べたいだけでしょ。

ふふ、もー。

でも、食べ物はいいかも。

今まで残るものって考えてたけど、こだわる必要ないよね。

誕生日は毎年続していくんだし。

食べ物でお父さんが好きなものと言えば…

やつぱり甘い物？ 豆大福好きだよね。

店長に相談して誕生日仕様の巨大豆大福作つてもううつてどうかな？

よし、決まりだね♪

男の人って甘い物苦手な人が多いつて聞くけど、うちの男性陣全員好きだよね。

特に和菓子。なんでだろ？

あはは、美味しいのは私も納得♪

あとは、ケーキだよね。

お父さんが好きなケーキといえば…モンブランだつけ？

モンブラン♪モンブラン♪ つて歌いながら、モンブランを食べていた気がする。

「最近はチーズケーキじゃないのか？」

あれ？ チーズケーキだつけ？

ああ～、お父さんお酒のおつまみでよくチーズ吃てるね。

お酒のおつまみのチーズと、ケーキじゃ別な気もするけど。

まあ、相手はお父さんだしどっちでもいいか。

当日は、豆大福とケーキを買つて、お父さんの好きな料理を多めに作れば、喜んでくれるよね。よし、そうしよう♪ けつて～♪

あつ…

あのお店に飾つてるワンピース可愛いなつて。
ちょっと、寄つてつていいかな？

ありがと♪

う～ん、サイズも合つてるし可愛いけど…値段は可愛いしない…。

お父さんの誕生日も控えてるし、バイト代もそんなに使いたくないし。

う～ん、う～～ん、う～～～ん。

うん♪ やめやめ♪

ごめんね、付き合わせて。

買うのやめる。

好きな感じだつたけど、春物のワンピースを着るにはまだちよつと寒いから。
もうちよつと暖かくなつて、まだお店に残つていたら買おうかな。

「俺も似合うと思つたけどいいのか？」

いいのいいの。

誕生日用のプレゼントも決まつたことだし帰ろう。

今年も無事、決まってよかつたね。

あつ、そうだ。

今のうちに言っておくけど、当田はちゃんとこちらに来てよ。
もちろん、お泊りだからね。

だくめ♪ お泊りです♪

こういうイベントの日じゃないと、ぜんぜん帰ってこないんだから。
家族の一員の自覚をもつてください。

うん♪ わかればよろしい♪

んつ?・どうしたの?

ああ、絵具。前に切れそうって書いてたもんね。
わかった。私あそこのベンチで待ってるね。

お帰り、早かったね。

あれ? その紙袋って…。

えつ、なになに?

私に?

あつ…。さつきのワンピース…。

ふふ、なにそれ? プレゼントって、私なんの記念日でもないよ。
そつか、君も似合うと思ってくれたんだ…。

嬉しい…。

すつづく嬉しいよ♪

ありがとう。大切に着るね♪

まだ、帰るのも早いし時間あるよね。

お礼したい。美術館行かない?

好きだよね?

入館料は私が払うから。

まだ帰りたくない。もつと君と一緒にいたいよ。

君が悪いんだよ。私を喜ばせてくれるから、もつと好きになつて、もつともーと一緒にいたくなるの。
だから、私と美術館デートしよう♪

ううん。君はやっぱり絵に触れているときが一番樂しそうだなって。
私も楽しいよ。樂しいに決まってる。私も絵は好きだし、何より君がいるから。

君と一緒に、どんな場所だって楽しいよ。

あははっ、定期的にアタックしておかないとね♪君は結構な忘れん坊さんだから♪
ふふ、(ゞ)めんぐ)めんぐ

あつ、カラスの絵だ。

新しく展示されたのかな？ 前来たときはなかつたよね。

だいぶ好きな絵かも…。

そうだね、カラスは好きだよ。

あれ？ 言つたことなかつたつけ？

鳥が好きってのもあるけど、カラスとツバメは特に好きかな。

ほら、(ゝ)の街つて桜が多いでしょ。

カラスが桜の実を落として、桜が増えたつて話を昔聞いたことがあつてね、

私、桜もこの街も好きだから、

「たくさん」の桜をこの街に咲かせてくれて、カラスさんありがとう」つて思つてるんだ。

まあ、嘘か本当かはわからない話だけね。あはは。

でも、そういう風に考えた方が、なんでも好きになれそうじゃない？

嫌いより好きなほうが、私も気分いいし。

ツバメは、私が「幸福な王子」が好きだからかな。

そうそう、オスカーワイルドの王子とツバメのお話。

お母さんが生きていたころね、幸福な王子の絵本をよく読んでもらつたんだ。

そのお話を聞いたとき、ふふ、私ワンワン泣いちゃつて。

ツバメさんかわいそう、王子ひどいやつ！

王子が引き留めなかつたら、ツバメさん死ななかつたのにーつて。

ふふ、笑つちやうよね。

ねえ…、君はハッピーエンドだと思う…？

ツバメにそばにいてほしくて自分を犠牲にした王子と、

王子にそばにしてほしくて自分を犠牲にしたツバメ。

王子とツバメの関係性は、ハッピーエンドだと思う？

あはは、それは私の解釈だよ。

お話つて、人それぞれの解釈があるから、「面白」と思うんだ。

ハッピーエンドとバッドエンド、どっちだと思つて。

「ハッピーエンドの話じやないか？」

そつか…やつぱりそう思うんだ。

私は…ふふ、秘密だよ♪

…おじさんの絵、戻ってきてたんだね。

櫻心中…。すぐ絵だよね。

黒と白だけで描かれているのに色が見える。

この絵が、君のお父さんを有名にしたんだよね。

外国の大きなコンクールで選ばれて。

私は…。あんまり好きな絵じゃないかな。

凄い絵だと思うし、綺麗な絵だとは思うけど、なんだか怖いって思う。

モノクロの絵が嫌ってわけじゃないよ、全く好きな絵だつてあるし…。

自分でもよくわからぬけど、おじさんの描く桜の絵が、苦手なんだと思う。

絵が悲鳴を上げているような感じがするの。

おじさん、ここ数年はニューヨークの風景や人物画を描いていたでしょ。

そういう絵はポカポカする感じがして、私は好きかな。

…あのね、言いたくなかったら言わなくていいし、怒ってくれてもいい。

…君がお父さんを嫌つてる理由って、この絵が関係してる?

比べられるのが嫌だつて前に言つていたけど…本当にそなうのかなって…。

君が桜の絵を描くときと、お父さんの描いた桜の絵を見るとき、何かに苦しんでるような同じ表情をして…。

でも、お父さんの描いた桜以外の絵を見るとときは、嬉しそうな顔をしてて…。

お父さんのこと本当は好きだけど、

嫌いにならなくちゃいけない理由が他にあるんじゃないかなって思えて…。

「いつか話せたら話すよ」

うん、今じゃなくて全然いい。

君が話したくなつたらいいから。

うん、待つてる…。

ほかの絵、見に行こうか♪

家まで送つてくれなくてもよかつたのに。

あはは、心配性だな。

でも、ありがとう。

お家寄つてく? 夕飯食べてつたら?

どうせ帰りに、お弁当買つてくつもりでしょ…

思いつきり目逸らせるし。

今日の夕飯はデザートに桜餅をつけようかな…

わつ、あつさりと考えを変えた。

お父さんは豆大福に弱々だし、君は桜餅に弱々だし、うちの男性陣はどうなつてるんだろう?
うくん、謎だ。

あつ、ごめん、ポスト見てくれる?

んつ、どうかした?

エアメール……?

君のお父さんだよね……?

これつて……高校を卒業したら、一緒にニューヨークで暮らそうってことだよね……?

「ふざけるな、ふざけるな！」

なんで破いて――。

ちよ、ちよっと、落ち着いて――。

「くそつ

――つ、何してるの！

ダメだつて！ 落ち着いて！ 大丈夫だから！ 大丈夫だから、ね！
私を見て、私の目を見て……！

「……美桜」

うん、そうだよ。君の可愛いお姉ちゃん彼女の美桜だよ？

「誰が彼女か」

あはは、騙されなかつたか♪

どう……？ 落ち着いた？

そう、よかつた……。

こんなところ見られたら、近所で噂になっちゃうね。
でも姉弟なんだし、姉が弟に抱き着くぐらい普通だよね？

えへへ。

手……痛い？

いきなり壁を殴るからだよ？

家が壊れちゃつたら、どうするの？

私の住むお家なくなっちゃうよ？

そうだよ、ちゃんと反省してください。

あつ、でも、そうなつたら君のお家に転がり込めるかも……。

ふふ、なうんてね♪

もうやつちやだめだからね？

うん、約束。

他の約束は破つてもいいから、この約束は破つたら絶対ダメだよ？

お家、入ろう。

手、消毒しないとね。

「何も聞かないんだな」

うん、聞かない。

君が話したくなつたらでいい。

でも、これだけは伝えておくね。

私は、君がどんな選択をしても全力で応援する。

だつて私は、君の家族で、君の第一人者で、君の絵の一番のファンだから♪

■ ト ラ ッ ク 7

起きてる?

一緒に寝ようと思つて。

お父さんもすっかり寝ちゃつてるから大丈夫だよ。

失礼しまーす。

ふふ、あつたかい♪

誕生日喜んでもらえてよかつたね。

毎年のことなのに、お父さんたくさん泣いて、私たちはそれをなだめて、でも、笑い声が尽きない。こんな日がいつまでも続けばいいのについて思つちやつた。

手紙のこともう決めた?

「行くわけないだろ」

ふふ、相変わらず嘘つき。

私は君のお姉ちゃんだよ? 弟が嘘ついていたら、すぐにわかるよ。

「嘘なんかじや…」

お父さんのこと嫌いって言つても、本当は好きだつて、)とも、本当はお父さんと一緒に絵を描きたいって)とも…。

血は繋がつてないけど、ずっと一緒に育つてきた家族だよ。そのぐらい、ぜんぶわかるよ。

私はね…。後悔してる。

もつとたくさん話しておけばよかつた…。

もつとたくさん大好きつて伝えておけばよかつたつて…。

お母さんともつと一緒にいたかったよ。

だから、私は君がうらやましい。

君はまだ会えるから。

会いたくても、会えないのは悲しいよ。

「俺がいなくなつても平氣なのか？」

前にさ、幸福な王子の物語は、ハッピーエンドかバッドエンドかの話をしたよね。

君はハッピーエンドを選んだ。

私はバッドエンドだと思つてゐるよ。

ツバメはさ、王子のもとを離れるべきだつたんだよ。

そばにいて欲したために願つた約束なんか無視して、離れるべきだつたんだよ。

そうすれば、ツバメは死なずに済んだんだから。

翼があるなら、飛ぶべきだと、私は思うよ…。

願い事や、約束は、相手を縛り付ける重たい鎖だよ。
一方通行な、願い事をかなえるために、約束を果たすために、頑張る必要ないんだよ。
重荷になつてゐるなら、そんな鎖捨てちやつていいの。

私ね…、君のことが好き。

ときどき嘘つきで意地悪な君が好き。

私の作った桜餅をおいしそうに食べてくれる君が好き。

兄のように頼れて、弟のようにかわいい、君が好き。

私の話を真剣に聞いてくれる君が好き。

私に笑いかけてくれる君が好き。

絵を楽しそうに描いている君が好き…。

この気持ちは本物で、これからも絶対消えない私の永遠の気持ち。

私は、離れないよ？離れることになつても、気持ちは離れることはないから。

ふああ。

眠たくなつてきちゃつた。そろそろ寝よつか。
手、繋いで寝よう。

ありがと♪

おやすみなさい。素敵な夢を見ようね。

すう、すう、すう、すう、すう
すう、すう、すう、すう、すう

■ トラック8

ああっ…♪ 久しぶりだね。元気だつた？

あれ？ 私のこと忘れてる…？

約束のこと…？

あはは…そうだよね。

えつとね、私は美桜。美術の美に、桜つて書いて美桜つていうの。

君の名前は？ そつが、素敵な名前だね。

うーんと、うーんと、あつ！

今日から私が君のお姉ちゃんだから。いつでもお姉ちゃんに甘えていいからね。

ほえ、誕生日？ ……誕生日いつ？

私の方が遅い…。

でもでも、私の方がこの家では君よりお姉ちゃんなんだよ？

歳はおんなじだけど、この家では私のことお姉ちゃんって呼ばないとダメなんだよ？

だったらお兄ちゃんって呼んだ方がいいの？

とにかく！私が君のお姉ちゃんになるから、困つたり悲しいことがあつたら、
今度は私が絶対助けるから、いっぱい頼つてね♪

おかえりなさい！

なんで無視するの！

帰つてきたら、「ただいま」つて言つんだよ。

はい、言つて♪

うん♪ おかえりなさい♪ ♪ えへへ～。

あのね、ちょっとといいかな？

えつとね… 桜餅作つたの。

料理するのははじめてで形は不格好だけど、君に元気になつてもらいたくて、
お店の人に教えてもらいながらね、頑張つて作つたの。

えつとね、えつと…。お父さん甘い物好きで、甘い物食べてたら笑顔になるから、

君も甘い物食べたら笑顔になるかなつて…。

だからね、えつと…、食べてもいいと嬉しい…な?

何か食べないと体悪くするよ…。

ダメ…かな？

あつ…。

どう…かな？

ほんと？ほんとにおいしい？えへへ、やつた♪
たくさん作つたから、たくさん食べてね♪

一緒にお絵描きしよ？

スケッチブックと色鉛筆、お父さんに買ってもらつたんだ。
こつちは君の分だよ。

：・絵描くの嫌いになっちゃったの？
だよね！ よかつた♪

あれ？ 色鉛筆使わないの？ だくさんの色があつて綺麗だよ。
ふくん、それじゃ私もただの鉛筆で描くつと♪
えへへ、おそろいだね♪

一緒に寝よっ？

いいよね、いいに決まってるよね。
ダメって言つても勝手に布団に入るもんね。
えへへへ、一緒のお布団。ポカポカしてあつたかいね。
そうだ、君がゆつくり眠れるように、魔法をかけてあげるね。
カラスが一匹、カラスが二匹。
ほえ、前にお母さんから教えてもらつたの。
羊を数えるとね、自然と眠くなるんだよ。
私、羊よりカラスの方が好きだから、カラスを数えているの。
続けるよ。

カラスが三四、カラスが四匹…。カラスが…五四…。カラスが…
すう、すう、すう、すう、すう
すう、すう、すう、すう、すう

だくめ！ お風呂一緒に入るの！
仲良し家族は、一緒にお風呂入るつて決まりがあるの！

君はお姉ちゃんのこと嫌いなの…？

えへへ、やつたー！

それじゃ早速、お風呂へレッツゴー♪

ねえねえ、この雑誌で紹介されてる人、君のお父さんなんだよね。
君のお父さんすばいんだね！

「桜の芸術家」だつて。

桜の絵がいっぱい載つてる。

綺麗だけど、ちょっと怖いかも…。

あれ？ この桜の絵、前に君が描いてくれた絵と似てる…？
んつ？ どうしたの？ なんか不機嫌になつてる？
えへ、怒つてるよ。

嘘言う弟には、こうだ！

「わよ、わよ、わよ、わよ、わよ～♪
わよ、わよ、わよ、わよ、わよ、わよ～♪
わよ、わよ、わよ、わよ、わよ、わよ～♪
わよ、わよ、わよ、わよ、わよ、わよ～♪

神様、仏様、学校様、どうかお願いします！
なにとぞ弟と同じクラスにしてください！

もう、また意地悪いう。

君はお姉ちゃんと別のゲーツになつてもいいの？

それとこれとは話が別です

えへ、ほんとだ。

や二たや二た♪ 同じケニアだよ!
学校でもよろしくね♪

君は美術部に入るんだよね？

絵描くの好きでしょ？

それ言つたら、私だつて自宅でもお話を書けぬけど。

でもでも、仲間と一緒に部活するのって、「青春！」って感じできっと楽しいよ。
それに、お互い部活してたら、帰る時間もだいたい一緒になるはずだし、毎日一緒に帰れるよ。

えへへ、バレたが♪

お姉ちゃん権限を発動します♪

すゞいよ、最優秀賞だつて！

大したことあるよ！

街のみんなにもいつぱい自慢しなくちゃね。弟がコノクールで最優秀賞取りましたって。

東がニシテノ一量修業賞

桜餅もたくさん作るね♪

大事な話があるの…。

私は…あなたのことが好きです。

弟としても、お兄ちゃんとしても、家族としても好きだけど、ひとりの男の子として…あなたのことが好きです。

私の恋人になつてくれませんか？

そつか…あはは…。フラれちゃつたか…。
理由、教えてもらつてもいいかな？

するよ…。私の気持ち、気づいてるのに、そんな言い方するよ。
君が嘘つくなら、私だつて諦めないから。

ふふん、そうだよ。君のお姉ちゃんは諦めが悪いのです。
だから、これから覚悟してね。たくさんアタックするから♪

家から出ていくつて本当？

なんで！私聞いてない！

なんでお父さんだけ？なんで私には言つてくれなかつたのー！？

そんなに私から離れたいの？

ひどいよ、気持ち知つてるくせに、ひどいよ…。

ねえ…約束覚えてる？

そつか、大目にしていたの私だけだつたんだね…。

あはは、「めんね、変な」と言つて。

男の子だもん、一人暮らししたいつて気持ちはあるよね。
新しいお家、私も遊びに行くからね。

家族なんだし、それぐらいよね？

起きて、ねえねえ、起きて。朝ですよ♪

うん、そうそう♪君が大好きな美桜お姉ちゃんですよ♪
えへへ、来ちゃつた♪

ほらほら、早く顔洗つて、一緒に朝ごはん食べよ。

明日、学校もお休みだし、泊つてもいいかな?
まあ、ダメって言われても、むりやり居座るけどね♪
えへへ、やつた♪

お泊り楽しみだな♪

一緒のお布団で寝るのは決定事項で、一緒にお風呂も決定事項♪
えへへ、お風呂ダメなのー？

昔は「お姉ちゃん一緒にお風呂入ろうー!」って君の方から言つてくれたのにな。

弟が反抗期になつて、お姉ちゃんは悲しいよ~

う、う、う…

あはは、驕られなかつたか♪

わ～わ～、聞きたくない、聞きたくない！ そんな辛口評論聞きたくないよー！

もう。また氣難しそうな顔して絵を描いてる。

ええ～！ぜんぜん汚くなんてないよ。

私は綺麗な絵だと思うよ。優しい色をしている。なんだかすゞ～君っぽい色。

あはは、君っぽい色は、君っぽい色だよ。

私は君の色と絵、どちらも同じくらい大好きだよ♪

私は、離れないよ？離れる」とになつても、気持ちは離れる）とはないから。

■ トラック9

そろそろ起きよ～、朝だよ～。朝ですよ～。

おはよう。

ずいぶんぐつすり眠つてたね。

珍しいよね、君がこんな時間まで寝てるなんて。いい夢でも見てた？

「見ていた氣がするけど何の夢か忘れた」

あはは、夢なんてそんなものだよね。

「そのワンピース……」

あ～、気づいてくれた？

この前、買つてくれたワンピースを着てみたの？

どうかな…？

「かわいいよ」

ふふ、ありがとう♪

今日さ、天気もいいし、展望台ペピクニックに行かない？
桜餅もたくさん用意したよ。

あはは、慌てなくても桜餅は逃げないよ。
玄関で待ってるね。

ううん、ぜんぜん待ってないよ。
スケッチブック持ってきてたんだ。
ふふ、やっぱり君はスケッチブックがよく似合つね♪

はい、あ～ん。

恥ずかしがる必要ないでしょ?」には私たちしかいないんだし。
おいしい? よかつた♪

君ってほんとうに桜餅が好きだよね。なんでそんなに好きなの?
まあ、好きってそんなものだよね。気づいたら好きになつていた、みたいな。
はい、もう一つ、あ～ん。

ふふ、桜を見ながら、桜餅を食べるつてなんかいいよね。

風流つて感じがして。

まあ、君は花より団子だけど。

「バレたか」

あはは、バレバレだよ。

あはは…。

楽しいね、だけど、こんな楽しい日々ももう少しで終わるんだね。
こっち来て。

桜、綺麗だね。

ここから見える景色、忘れないでね…。

「美桜?」

こんな言葉を知ってる?

自然是芸術を模倣する。

うん、幸福な王子のオスカー・ワイルドの言葉。

私、この言葉好きなんだよね…。

私ね、死にたいと思ったことがあるの…。

お母さんが病氣で亡くなつて、会いたくても会えなくて、

この街で星に一番近い、この展望台に来ても、どうする? ともできなくて…。

ずっと泣いていた私に、声をかけてくれたのは君だった。

君はスケッチブックに絵を描いてくれた。

満開の桜の絵。

鉛筆で描かれたモノクロの絵なのに、私にはしっかりと色がついて見えた。
あのとき見えた綺麗な色は、いまでもはっきりと覚えてる。

私の世界はずつと曇り空で、ずっと雨が降っているように暗かつた。
だけど、雲の小さな隙間から光が差し込んで、光はどんどん大きくなつて、
私の世界は急に明るくなつたの…。

悲しいのに、暖かな気持ちでいっぱいになつて。
気づいたら、泣きながら、笑つてた。

私にとつて、君の描く絵は、そういう絵。
自然が芸術を模倣するような、そういう絵。

決めたんだよね？　お父さんとの、行くつて。
朝ね、君の日を見たとき、思ったの。
ああ、決めたんだなつて。
わかるよ、君のことならなんでも。
ずっと想つて、ずっとそばで見てきたんだから。

お父さんと一緒に楽しく絵を描いてね。
向こうに行つても、この街の思い出や景色を忘れないでね。
それで、ときどきは私のことを思い出してくれたら嬉しいな、えへへ…。

えつ…スケッチブック…？
見ていいの？

——つ。黒いカラスと白いカラスの絵…。
この絵つて…。
次のページも、私の小説の…。
ぜんぶ…私の小説の絵…。
約束…ぐすつ、覚えてくれていたんだ…。
ずっとね、不安だったの。
私との約束、忘れちやつたんじゃないかつて…。

「忘れたことなんてなかつた」
うん…うん…。

私もね、忘れたことなかつたよ…。

君との約束、一緒に絵本を作るつて約束…。
約束があつたから、今まで書いてこれたの。

あはは。

やっぱり君は魔法使いだね。私を笑顔にしてくれる魔法使いだ。

約束しよつ？
これから約束。

私ね、君の絵に合う物語をたくさん書くよ。
だから君も、私の物語に合う絵をたくさん描いてね。

指切りげんまん、嘘ついても、嘘つかなくても、絵本をつくる、指切つた♪
あはは、凄くそろつてたね。覚えていたんだ。

「だって変な歌詞だつたし
もう、変な歌詞は余計だし。

あはは。

うん、いつか一緒に絵本を作ろうね。
約束だよ♪

■トラック10

この手紙が最初で最後になる」とをお許しください。

臆病で卑怯者の僕では美桜に直接伝えることができないと思い、手紙を書くことにしました。

僕は今、父の家と一緒に暮らしています。

毎日のようにアトリエにこもり、父の隣で絵を描いて一日が終わる。そんな毎日です。

父と再会するまで、正直不安でした。

僕は父に対して恨みと負い目、父もまた僕に対して恨みと負い目を抱えています。

そんな自分たちが同じ空間で一緒に絵を描くことができるのか不安でした。

ですが、アトリエにある、父が描いたたくさんの絵を見た瞬間、不安は消え、描きたい衝動に駆られました。

気づいたときには、僕たちはキャンバスに絵を描いていました。

何年も離れて暮らしてきた家族なのに、家族らしい会話は一切なく、絵を描き続けました。

父は僕の絵を妬み惹かれ、僕も父の絵を妬み惹かれる。

なんだ関係だけれど、唯一「絵」だけが、僕たち親子を結びつける糸なのでしょう。

はじまりは、僕が桜の絵を描いたことがきっかけでした。

僕の両親はどちらも売れない画家でした。

自分の才能に見切りをつけ絵を描くことをやめた母親と、自分の才能をひたすら信じて絵を描き続けている父親。

そんな家庭で僕は産まれ育ちました。

当時の僕は父の影響から、毎日のようにスケッチブックを持ち歩き、田に入る景色を鉛筆で描くようなりました。

日々を過ごしていました。

ある日、僕は父に連れられて、桜の綺麗な街に行くことになりました。

その街は、父の地元で、父の友人が亡くなつたことから、葬儀に出席することになったのです。

僕はその街の、展望台で描いた桜の絵を、父に見せました。

普段はあまり絵を見せないのですが、嬉しいことがあって、父に絵を見せたくなつたのです。

桜の絵を見せた日を境に、父は狂つたように桜の絵を描くようになりました。日常生活の全てを捨て、描くことだけをおこなうようになりました。

そして、最後には僕と母を捨て、家を出ていきました。

父親がいなくなると、家族が崩壊するのは一瞬でした。

元々心の弱かつた母は、父がいなくなつたことから、僕に当たるようになりました。

絵を描くのをやめろ、父親の真似をするのをやめろと、何度も言されました。

でも、僕は絵を描くのが好きで、やめることができませんでした。

絵を描き続ければ、父が帰つてくるかもしれない。

もっと上手で綺麗な絵を描けば、母が喜んでくれるかもしれない。

そう思つて、母に隠れて、そり絵を描いていました。

その絵が見つかり、絵を破られたとき、僕は残酷な言葉を言いました。

お前なんて死んでしまえ。

家を飛び出し、夜遅くに家に戻ると、母は首を吊つっていました。

僕が母を殺し、家族を壊したのです。

それからの日のことは、あまり覚えていません。

気づいたら出でていったはずの父が目の前にいて、何度も謝りながら、僕のことを抱きしめていました。その数日後には、父の友人に預けられ、一緒に暮らすようになつていきました。

後は、美桜もよく知っている通りです。

優しい父親と、優しい女の子に迎えられ、幸せな生活を送つたこと。

一緒に暮らすうちに、どんどんその女の子のことが好きになつていったこと。

好きな女の子に好きだと言つてもらえて、怖くなつたこと。

距離をとるため、一人暮らしを始めたこと。

絵を描くのをやめようと思つても、やめられなかつたこと。

約束を覚えているのに、忘れたふりをして、遠ざけようとしていたとも…。

展望台で渡した、黒いカラスと白いカラスを描いたスケッチブックは、美桜の画家として、最後の別れのつもりで描いたものです。

僕は自分の絵を、モノクロでしか見ることができません。

キャンバスに色をつけても、僕にはすべてモノクロに見えるのです。絵具を混ぜ、求めている色を作ることができても、

キャンバスに色をつけた瞬間モノクロに見えてしまうのです。

先天性の障がいではなく、精神的なものです。

何が発端だったのかはわかりません。

母に色のついた絵を破られたときだつたかもしれないし、

僕の絵を模倣して描いた父の櫻心中の絵を見たときだつたかもしれません。

他の人が描いた絵は色がついて見えるのに、僕の描いた絵だけ色がついて見えないのです。モノクロの世界しか描けない僕では、美桜の画家になることはできません。

物語の絵に色をつけることはできません。

幸福な王子がツバメのそばにいられたのは、幸せを与えることができたからです。ツバメが王子のそばにいられたのは、幸せを運ぶことができたからです。

僕は幸せを与えることも、幸せを運ぶこともできません。

僕と一緒に、絵本を作ることはできません。

約束を守れなくてごめん。

僕は美桜の書く物語がずっと大好きでした。

最後に、

たくさん笑顔を見せてくれてありがとう。
たくさん桜餅を作ってくれてありがとう。
たくさん好きと言つてくれてありがとう。

僕の絵を「自然が芸術を模倣する絵」と言つてくれてありがとう。

作家になつた美桜の書く物語をいつか読める日を楽しみにしています。

■ トラック1-1

すべての物語を書き終えると、自然と溜息がこぼれた。
空白になっているタイトル蘭を眺める。

作家はふたつのタイプに分かれると思っている。

物語を書く前にタイトルを決める作家と、物語を書き終えてからタイトルを決める作家だ。

普段の私は物語を書き終えてから、タイトルをつけている。

物語が先にあり、タイトルが後にあるのだ。

書き終えた物語を眺め、物語にふさわしいタイトルをつけるのが私の執筆スタイルだった。

だけど、今回だけは違った。

物語を書く前から、タイトルは決まっていた。

執筆スタイルを守るため、タイトル蘭は空白にしていたけれど、ずっと心の中に物語のタイトルがあった。

この物語を書くなら、このタイトルしかないと思った。

手紙に手を触れる。

届きますように。想いが伝わりますように。

心のなかでそつとつぶやきながら、物語のタイトルに、「モノクロの世界に色をつけて」と名前をつけた。

■トラック12

展望台のベンチで、私は今日もノートに物語を書いている。

暖かな風が頬をかすめるたびに、ひらりはらりと舞う桜が視界に入るたびに、季節が廻りまた春がやつてきたのだと思い知らざれ切なくなってしまう。

うつむきながら物語を書いていると、「泣いているの?」と声がした。

懐かしくて……、暖かくて……、優しくて……、愛おしい……。そんな声だった。
声を出せずにいると、音が聞こえてきた。

ベンチに座る音。

ページをめくる音。

かさかさ、かさかさ、と聞きなれた心地よい音。

「なに書いているの?」と私は聞いた。

「桜の絵を描いているんだ」と彼は言つた。

思わず笑つてしまう。

彼も笑つているようだつた。

「桜が好きなの?」と私は聞いた。

「とっても好き」と彼は言つた。

「よし！ できた！」

その声に、私はスケッチブックを覗く。

枯れ木だけが描かれていた。

花びらが一枚も描かれていない、枯れ木だけの寂しい絵。

「今から魔法を見せてあげる」と彼は言った。

かさかさ、かさかさ、とわたしの好きな音を鳴らせながら、彼は描き始める。花びらが描かれていく。

1枚、2枚、3枚…。

手は止まらない。迷いなく、描き続ける。

10枚、20枚…。

花がどんどん咲いていく。

鉛筆で描かれたモノクロの花びらは、私には世界で一番尊くて綺麗なピンク色の花びらに見えた。枯れた桜の木は、まるで魔法のように満開の桜の木にかわっていた。

「たくさん見てもらいたい絵があるんだ」と彼は笑顔で言つ。

「私もたくさん読んでもらいたい物語があるの」と私も笑顔で答える。

1,000枚の絵じや全然足りない。

1,000本の物語じや全然足りない。

展望台から見える、数えきれない桜の花びらのように、数えきれないぐらいの物語と絵を、長い時間をかけて一緒に書いていくつ。

「おかげりなさい」

私の言葉に、「ただいま」と彼は答えた。